第11号

1 May 2012

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan
Newsletter No.11

ヴィクトリア朝研究の新しい地平をめざして

会長　井野瀬久美恵

本学会は、学際的な視点からヴィクトリア朝イギリスについての理解を深めることを大きな目的として活動を重ねてきました。松村昌家先生、荻野昌利先生によって基礎が築かれた本学会をさらに発展させるために、私は今、二つのことを考えています。

ひとつは、できるだけ多くの領域・分野の専門家と横断的に対話を重ねていきたいということ。その際、「ヴィクトリア朝文化」がヴィクトリア女王の治世（1837～1901）だけを対象とするわけではないという認識を持つことが大切だと思います。「ネオ・ヴィクトリアニズム」と呼ばれる動きのみならず、ヴィクトリア朝という時代、この時代に育まれた文化は、21世紀の現代にさえ、大きな意味と強い影響力を持ちつづけています。本学会の看板に掲げる「ヴィクトリア朝」とは、かくも不思議な、奥の深い世界なのです。

もうひとつは、若手研究者の力になりたいということです。大学という場の意味が大きく変容した/今なお変化しつつあるなかで、若手研究者は、自らの居場所を、目の前に開かれているはずの未来を、見失いがちです。それは単純に「就職先がない」といったことに留まりません。若者を育てない/育たない国は滅びるしかない。若手研究者がもつ可能性を引き出し、それを本学会の力に変えたい――それが私の願いです。

以上の2点を基調として、本学会をヴィクトリア朝研究の拠点として、さらなる飛躍の軌跡を描ければと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

目次：

会長就任あいさつ　1
井野瀬久美恵

特別講演　2
≪文化≫とはなにか？
荻野昌利

シンポジウム
「ヴィクトリア朝の人びとはいかに幸福であったか」
重富公生
小田川大典　3
小野塚知二　4
有江大介　5
6

研究発表
山内香澄　7
外山健二　8
岡谷慶子　9
髙橋明日香　10
庄子ひとみ　11
堀内真由美　12

第12回大会シンポ企画　13
「海の歴史とヴィクトリア時代」

2011年度総会報告　14
2010年度決算　15
2011年度予算

会員の業績2011　16

第12回大会のお知らせと研究発表の募集　20

2011年度大会報告

2011年11月19日(土)、甲南大学文学部において、年次大会が開催されました。以下、当日の記念講演、シンポジウム、自由研究発表の記録を掲載します。報告要旨に加えて、大会での議論を踏まえたコメントも加えてもらいました。

【特別講演】

≪文化≫とはなにか？
ーイギリスにおける≪文化≫の生成と発展の歴史ー

前日本ヴィクトリア朝文化研究学会会長
荻野昌利

これは「文化」という言葉そのもの歴史であり、それゆえに《　》の括弧でくくられなければならないということ。とにかく西洋社会のなかで、“Kultur”（独）、“culture”（英）という言葉は古くから存在していた。それはそもそも「耕作」を意味する言葉として始まった。それが19世紀の初め全体的な教育への関心の高まりにつれ次第に用法が比喩に転じて行き、広く「精神の涵養」、すなわち「教養」を意味するところとなった。そうした動きにとりわけ熱心だったのは、“Oxbridge”などの古典語の涵養に熱心ないわゆるヒューマニストたち、人文科学専攻の知識人階級だった。彼らの手によって大学におけるカリキュラムは古典語を中心にした“culture”=「教養」の習得に主眼が置かれるものに次第に統一されるようになっていったのである。

しかしそれだけでは満足できない連中がやがて台頭してくる。中心はJ.S. MillとかJ.H. Newmanのような「教養」を人格形成の至上の目的とみなす教養至上主義者たちだった。彼らは単なる知識の習得では飽き足らず、学問、いや人生究極の目的、“culture”とはなにかを問い詰めようとした。その理想はやがてMatthew Arnoldに受け継がれ、彼の努力を介して“culture”は単なる知的エリートの独占的専門用語の域を脱却し、社会的により開かれた言辞として、一般知識人の関心を呼ぶテーマになってゆく。その結果1870年頃には、その言葉はいわば時代の代表的“cliché”として人口に膾炙するものとなったのである。

ただここに大きな問題があった。Arnold自身はあくまでも教養至上主義の伝統の継承者として、古典的ヒューマニズムを擁護する立場を極力堅持しようとしたのだが、彼の主張は新しく台頭しつつあった、例えば科学や人類学、社会学などの領域で、それぞれ独自の解釈が施されるようになり、これらの新しい社会・自然科学を主体とする“culture”の台頭により、人文科学主体の伝統的基盤が蚕食されて言った。それだけではない。いわゆる“pop culture”と称せられる文化活動もこの当時から急速に勢いを増しつつあった。

Arnoldはかの有名な『教養と無秩序』（1869）において、社会の無秩序を治療するものとして“culture”の特効性を説いたが、実は“culture”そのものが彼の晩年のころにはすでに無秩序状態に陥っていたのである。もちろんこれはArnoldの本意ではなかった。彼は最後まで人文主義を基軸にした“culture”の意義を力説し続けたが、もはやかつてのような説得力を発揮することはなかった。

20世紀に入ってからも、ヒューマニストたちの伝統的“culture”復権の運動は絶えることなく続けられたが、事態はますます混乱するばかりで、もはやだれも“culture”をまともに定義することはできなくなってしまった。1971年、G.SteinerがT.S. Eliotのキリスト教的ヒューマニズムの精神を理想とする『「文化」定義に向けての覚え書き』（1948）への反論として『青髭の城にて―「文化」の再定義へ向けてのいくつかの覚書』（1971）を発表したが、彼によれば《文化》をもはや言語の形で統一化する術はない。前方に開かれているのは暗の世界あるのみである。視聴覚文化がやがてそれに取って代わることになるであろう。という暗く皮肉な予言をしているが、われわれは今日の社会現象を見るにつけ、このSteinerの予言を生鵠を射たものとして受け取らざるを得ないのである。《文化》も言葉自身として限りのない膨張を続け、巨大な星雲と化し、やがて宇宙の惑星と同様に膨張の果てに爆発し飛散してしまうのではないか。そのような《文化》そのものの危急存亡の時にあって、われわれはそれをいかに再構築し、新たな生命体として甦らせることができるか、真剣に考えなければならない。そのためにはわれわれは改めて原点に立ち返って、ヴィクトリア朝の《文化》の概念を再考することから始めなければならないであろう。

【シンポジウム：ヴィクトリア朝の人々はいかに幸福であったか（その１）】

1851年ロンドン万国博覧会と労働者

重富公生

（１）報告要旨

この報告では、ヴィクトリア朝の民衆の「幸福」体験の一齣として、ヴィクトリア朝イギリスを代表する催しのひとつであった1851年ロンドン万博への労働者の参観を取り上げる。ロンドン万博は、しばしば政治的動乱と社会的変動のイメージで描かれる19世紀第二四半世紀（1830、40年代）から繁栄の第三四半世紀へ移行するにあたっての時代の転換を画する催しであったばかりでなく、イギリス社会が階級対立から広範な階層の社会的調和へと移行するきっかけとなった行事として認識されてきた。じじつ、延べにして当時のイギリスの全人口の五分の一にあたる万博会場への入場者は膨大な数の労働者によって占められていた。本報告は、このロンドン万博開催にあたり、万博の主催者たちは労働者をどう受容し、また労働者は万博をどう受容したのかという両方の視角でアプローチしたものである。ロンドン万博の正式名称は「全諸国の産業成果の大博覧会」であったが、主催者たちも、その「成果」を生み出す有力な主体であった労働者の協力は、万博の成功にとっても決定的に重要な要素であると見ていた。そのため、地方の準備委員会を立ち上げる段階から労働者たちにも開催のための寄附金の醵出を呼びかける一方で、地方委員会は彼らが上京して万博を参観するための給与天引きの積み立てを奨励していた。しかし労働者の積極的参加を促すために企図された労働者委員会の設置が主催者たちによって拒否されたことにも現れているように、先立つ40年代の社会的・政治的動乱の記憶が醒めやらぬなか、労働者の無防備な大量受入れについて、この時点では危惧する声が高かった。一方、しばしば指摘されているように、19世紀なかばは労働者民衆のレジャーの歴史において一大転機でもあった。すなわち、前工業化社会の社会構造と生活カレンダーに即した伝統的民衆レジャーから、都市化の進行する商業・産業社会にふさわしい「近代的」レジャーへと変貌を遂げていった時期であり、そのためのインフラも急速に整備されていった。労働者はこのような変貌を徐々に受入れてあらたなレジャーに積極的に参与していきながらも、伝統的性格を色濃く残す行事も根強く存続していた。万博の見学は、中産階級が唱導していた労働者のレジャーの「健全化」にとって、まさに絶好の機会であり、労働者たちも、一部で万博開催における労働者の役割の軽視やそのコンセプトについての反感もあったものの、「シリング・デー」にはロンドンへ、水晶宮へと殺到することで、その「期待」に応えた。また、労働者の大挙入場のもたらす不測の事態への危惧とはうらはらに、その見物のマナーもおおむね賞賛に値するほど良好なものだった。シリング・デーの開始まで抱かれていたさまざまな懸念はおおかた消え去り、1851年の夏頃には展示品というよりも、階級を超えて集う人々こそ、会場の「見もの」となっていた。水晶宮内では、どの観客にとってもその階層のみならず、個人的趣向、職業、出身地、宗教等々の差異に応じたそれぞれの興味と関心が満たされ、それぞれの観客に「場」が与えられたのである。会場で、そして「社会」で場が与えられているという意識を持ったとすれば、もしかするとこのこと自体、労働者が水晶宮のなかで感じた最大公約数的な幸福感といえるかも知れない。

（２）報告への質問と追加的コメント

本報告自体への質問をあげると、まず松村昌家氏から、第一に労働者の万博にたいする反応は、1840年代から1850年にかけての時代的風潮の流れのなかでとらえるべきこと、第二に、1851年のロンドン万博と1862年のそれとは性格が違い、前者については水晶宮がシデナムに移転したあとの役割ともあわせて考察する必要があるという質問をいただいた。また井野瀬久美恵氏から、「産業革命」の存在をめぐる議論と水晶宮での催しがどうかかわっているのかという質問が出された。松村氏の質問、第一点については報告のなかで19世紀半ばの時代状況について少しく説明したが、第二の質問ともつながる大きな問題であり、現在課題として取り組んでいるところである。井野瀬氏の質問については、両者の直接のかかわりを手短に要約することは（論点があまりにも多岐にわたり）むずかしい。ひとつだけ言えば、水晶宮内の膨大な展示物は、産業革命概念を「リハビリテイト」しようとする近年の一連の研究において重視されている、product innovation（機械化等の生産工程の改良であるprocess innovationにたいして、製品の質の改良や製品ラインアップの多様化、新製品の創出などを意味する）の格好の事例としてあげることができよう。

【シンポジウム：ヴィクトリア朝の人々はいかに幸福であったか（その２）】

自分語りの快楽

小田川大典

チャールズ・テイラー『自我の源泉』によれば、現代人の世界観は、17世紀の王権神授説（超越神と奇蹟への関心）の時代のそれとも、18世紀の理神論（内在神あるいは神が合理的に設計した世界への関心）の時代のそれとも大きく異なっているが、19世紀のそれとは「自己への強い関心」という点で連続している。実際、周囲を見渡すと、若者はブログやツィッターへ書き込むことで、年長者は自分史を書くことで、それぞれの〈自分語り〉を楽しんでいるといえよう。本報告ではこの〈自分語り〉への関心を手がかりにヴィクトリア期の教養（culture）論の現代的な意義について検討を試みた。

ヨーロッパ精神史における〈自分語り〉の起点は18世紀に発生した自伝文学に求めることができる。中川久安『自伝の文学』によれば、自伝文学というジャンルは、18世紀において、伝統的な農村社会の崩壊と農村人口の都市への流出によってバラバラに原子化し、伝統や宗教に支えを見いだせなくなった個人が、自己の内部に自らの存在の確かさを求めたことによって始まった（その最も典型的な例がルソーの『告白』である）。そして、この動向に内実を与えたのが、思想としてのロマン主義――就中、①世界を描き出す客観的な「鏡」から内なるものを燃え立たせる主観的な「ランプ」へという芸術観の転換と、②美的な自己表現を通して理想的な人格を陶冶するという〈自己形成＝教養〉の思想――にほかならない（エイブラムズ『鏡とランプ』『自然と超自然』を参照）。

マシュー・アーノルド『教養と無秩序』やジョン・ステュアート・ミル『自由論』に代表されるヴィクトリア期の教養論（その詳細については田中秀夫ほか編『共和主義の思想空間』富永茂樹編『啓蒙の運命』所収の拙論を参照して頂きたい）はこうした思潮を背景として成立したものであり、それは同時代のピューリタン的な禁欲主義と功利主義者の快楽主義の両者に対する批判を含んでいた。だがレイモンド・ウィリアムズが『教養と社会』で指摘したように、ヴィクトリア期の教養論には、〈自分語り〉を社会から切り離し、知識人を寄る辺のない根無し草的な存在へと追い込んでしまう危険性が含まれていた。現代の〈自分探し〉の幸福論に見られる空虚なナルシシズムへの傾斜は、既にヴィクトリア期の教養論にも看取しうる問題点だったのである。

報告ではこうしたヴィクトリア期の教養論の現代的な意義について考察を試みたが、他の報告者から二つの重要なご指摘があった。第一に、有江会員からは、ヴィクトリア期の社会思想において、ごくわずかの知識人が唱えたにすぎない反功利主義的な教養論と、幅広い層に受容されていた功利主義とではどちらが時代の本質を反映していたのかという質問を頂いた。第二に、小野塚氏からは、教養論も功利主義と同じくある種の快楽主義を前提としないと成り立たないのではないかというご指摘を頂いた。どちらも重要な問題であり、当日は時間の都合で十分に応答できなかったが、今後の課題とさせて頂きたい。

シンポジウムに続いて開催された特別講演「《文化》とはなにか？」でも指摘されていたことだが、ヴィクトリア期とは “culture” という概念が様々なかたちで問題化した時代であり、「ヴィクトリア朝文化」という場合の「文化」は、「現代日本文化」等の「文化」とは全く異なる重みを持っている。今後もこの取扱注意の概念が日本ヴィクトリア朝文化研究学会で繰り返し問い直されることを期待している。

【シンポジウム：ヴィクトリア朝の人々はいかに幸福であったか（その３）】

ヴィクトリア時代の身体的幸福
―食と音楽―

小野塚知二

本報告は食と音楽に注目して、ヴィクトリア期の身体的幸福のありさまを探ろうとする試みである。ヴィクトリア期は、小説、詩・戯曲、神学、経済学、歴史、弁論・政治など言語化された領域での成果が目立つが、言語化され難い領域はいかなる状況にあったのだろうか。技術や工学は、この時期に工学書や専門雑誌が刊行されるなどようやく言語化の体系的な努力が始まるが、徒弟制度に象徴されるように語られざる秘技性も色濃く、技師・職人・熟練労働者を通じたクラフト的性格の根拠はそこにあった。食、音楽、性も言語化され難く、言語だけでは片付かない領域であるが、ヴィクトリア期には特有の言語化・記号化の型が見られた。

本報告が身体的幸福に注目するのは、イギリス食文化が19世紀前半に決定的に衰退してから２世紀が経過しているのに回復できないことに関心をもつからである。言語化・概念化・体系化され難い文化領域はいったん衰退すると、意識的な教育や訓練も成立し難いから容易に回復できないのだが、これは、現在の日本の食を含むさまざまな非言語的領域を冷静に見つめ直す必要性を示唆しており、単にイギリス文化史だけに固有の問題ではない。

本報告の本論に相当する部分は、簡単には要約できないので、当日配布したフルペーパー(http://www.onozukat.e.u-tokyo.ac.jp/foodandmusic.pdf)を参照していただくこととして、以下では報告の論点の概略を振り返り、結論と討論について若干記すにとどめる。

報告の第１節で、身体的幸福を論ずるための科学的な方法の基礎として、意味内容ではなく意味形式を対象とすべきことを指摘し、次に、食文化の意味形式を客観的に確定する方法として小野塚が旧稿で提示した三つの指標(食材の多様性、食材の在地性、調理方法の多様性)を紹介した。それをイギリスの過去５世紀のレシピ分析に適用すると、18世紀まではこれら三指標から見て豊かな成果が残されていたことが判明する。第２節では、三つの何れの指標でも大きな変化を経験した18世紀末から19世紀前半に掛けての時期に発生した変化を、「村」と「祭り」の消滅として特徴付けた。この過程はおよそ三世代にわたり緩慢に進行したため、食の衰退への危機感は強く意識されなかっただけでなく、音楽と比べても言語化の程度が低いため、学校設立や教科書編纂などを通じて食の能力を再生産しうる可能性は限定されていた。音楽が19世紀末に復活したのと食が鋭い対照を見せる根拠はここにある。第３節は衰退後(＝ほぼヴィクトリア期)も食と音楽に対する関心と支出が持続していたことを指摘したうえで、この時期の身体的幸福の新たな特徴として、文化の植民地的状況を検出した。他方、ヴィクトリア期の文化的達成としてのティーは、「村」と「祭り」とは異なる都市的で中産階級的な環境に登場した高度に様式化された文化であるが、こうした世俗内禁欲的潮流においても身体的幸福はささやかにではあるが追求された。

本報告は、身体的幸福がヴィクトリア期にも独特の仕方で維持された理由として、イギリスがヨーロッパと連続した文化圏の中にあったことに求め、移転、相互参照、相互浸透などの関係の中に文化史研究を再構築する必要性を指摘した。討論を通じて、①客観的な再現可能性を確保するための方法と、印象批評に基づく文化研究との対話の可能性を保持すべきこと、②幸不幸を感ずる主体が個人であることをとりあえずは首肯するとしても、そうした方法論的な個人主義では食のように非言語的で身体感覚的な幸福を科学的に論ずることは不可能(「蓼食ふ虫も好き好き」)となるので、外的環境や他者との関係の中で意味形式をとらえる(テクストそのものを扱うのとは別の)方法が必要であること、③ヴィクトリア期に特有の幸福のありかという観点から、「衰退」とは別の概念でその特徴を再構成すべきこと、④食や音楽に注目した場合にも、産業革命期に不可逆的な変化が発生していたことの、四点について改めて考えさせられた。

【シンポジウム：ヴィクトリア朝の人々はいかに幸福であったか（その４）】

ヴィクトリア時代の金銭と幸福
―幸せは金で買えるか―

有江大介

ヴィクトリア時代の時代精神とは科学と進歩でした。そのもとに、問題を孕みながらも19世紀全体としては急速な産業化・都市化の過程で生活水準の向上と大衆消費社会化が進展しました。現代社会の原型が形成された時代であり、それを支える価値観がベンサムに代表される功利主義です。こうした動向を、ヴィクトリア時代を代表する多くの知識人がその即物性、俗物性、世俗性を様々な形で批判しました。しかし、それらは果たして意味ある批判であったのでしょうか？

この時代精神を象徴したものが、「水晶宮は…人類の進歩を意気揚々と目に見える形で明示した」（A.ブリッグス『ヴィクトリア朝の人びと』ミネルヴァ書房、1988年）と評されるクリスタル・パレスです。ラスキンは、「それ[水晶宮]が表現する思想は、…いまだかって例のない大きな温室を作ることが可能だ…という…思想、それ一つに尽きる…。ガラスが人間の知性を表しうるのは、たかだかこの程度の思想と若干の平凡な数字だけである」（マーティン.J.ウィナー『英国産業精神の衰退：文化史的接近』勁草書房、1981年より再引用）と述べ、そこにあるのは「科学技術の偽りの神」と「拝金主義者の福音」（同上）と決めつけました。カーライルは、ブルジョアジーが関心を持つのは「金や名声や、その他のこの世の利益などを――とりわけ金を――手に入れること」のみであるとみなし、相互扶助から「公平な競争」状態へと転換した新しい社会での人間関係を“人と人の間の唯一の絆の現金払い”と否定的に特徴づけました（『過去と現在』1843年、第2章）。

M.アーノルドも『教養と無秩序』の中で経済進歩を担う新興ブルジョアジーを拝金主義者と軽蔑し、ディケンズの小説の登場人物である裕福なロンドン商人は、自立した実業家ではあっても金銭欲、物質欲のために人間性を失った人間として描かれました。

しかし、ヴィクトリア時代の時代精神は実業家だけでなくむしろ、知識人から無視されがちな労働者階級や個人事業者たちの逞しい経済的向上心と至富欲という、ロンドンの大衆的心性に象徴的に発現していたのではないでしょうか。呼び売り商人による一次産品や日用品の販売から小規模小売商、都市営繕、交通、娯楽産業から小金融にいたるペニー・キャピタリストたちが、ロンドンなどの都市経済生活を潤滑油として支えていました（John Benson, *The Penny Capitalists*, Dublin: Gill & Macmillan. 1983)。彼らの生き生きとした日常と一貫した向上心、家族総働きによる世帯可処分所得増大への不断の意欲は立派な“幸福の追求”と言えます。犬を飼う、カードの賭け事、劇場通い、闘犬や犬のネズミ殺しなどの貴族や知識人たちが眉をひそめる休日娯楽まで、そこには独自の日常が存在していました。それは、現代の発展途上国の状況にも似た、体制的教養人の反拝金主義、反商業とは正反対の、冨の追求と生活向上への意欲に満ちた楽天的でエネルギッシュな世界です。

経済的世界としての近代は、人々の食欲・性欲という自然的欲求に基礎を持つ経済行為によって一つの強固なシステムとして編成されています。したがって、現代の“強欲資本主義”は、A.スミスの時代からヴィクトリア時代を経て現在まで力強く連続するトレンドの帰結と言えます。そのなかで、ヴィクトリア時代は、知識人が忌避・嫌悪しようとも、普通の人々の幸福を目指す“欲求発露”が一般化した画期として位置づけられると思います（cf. Kathleen Blake, *Pleasures of Benthamism: Victorian Literature, Utility, Political Economy*, OUP, 2009. 田中裕介書評『ヴィクトリア朝文化研究』8号、63－67頁、2010）。

本報告の内容に直接関わる質問はありませんでしたが、本学会の主流である文学研究、文化史・社会史的研究と、実は相当の蓄積のあるヴィクトリア時代の経済思想史的研究とを架橋するきっかけとなることを期待します。

【研究発表（1）】

ヴィクトリア朝の女性と道徳

山内香澄

Sensation novelは、1860年頃からヴィクトリア朝の出版界に隆盛し、その後衰退した大衆小説の一ジャンルである。このジャンルは、長年文学界から姿を消していたが、最近ではフェミニズム批評の視点からの見直しが進められている。とりわけヴィクトリア朝期に流行したことについての理由は、社会的言説との関係があると考えられる。

Ellen Wood の *East Lynne* は、sensation novelの先駆的存在としてしばしば取り上げられる。そこで、本発表では、前半で19世紀の女性と「家庭の天使」との関係について言及し、続いて作中における道徳がどのように用いられているかを考察した。

産業革命により起こった経済的・社会的変化が、特に中産階級の男女の役割に変化をもたらした。職の分化が進むにつれて、女性のステレオタイプとして「家庭の天使」という言葉がもてはやされるようになった。主人公Isabelは、天使のような容貌を持った、一見「家庭の天使」のような存在である。しかしながら彼女は、妻として何もしない生活に退屈を感じながらも、家事の知識もなく天使にも女主人にもなれないため、家庭の中に自分の居場所を見つけることができないでいる。Woodは、男性が作り上げた女性のイデオロギーに対応することができない女性の存在を明らかにしている。

また、Woodは、他のsensation novelistたちよりも、宗教的に道徳をといている面がある。Isabelは、夫CarlyleとBarbaraとの関係を疑い、Levinsonの誘惑に乗り、駆け落ちをする。この彼女の道徳的に謝った行動は、作品の後半部分で罰せられることになる。まず、Levinsonの裏切り、列車事故－事故で子供を失い、加えて自身も生死の境を彷徨ったあげく容姿も変わり果てる－という不幸が彼女の身に襲いかかる。事故後、彼女は、East Lynneにガヴァネスとして戻るが、Woodは、crossという単語を用いて彼女を一般的な道徳上の言葉だけでなく、宗教的な意味からをも罰する。そして、彼女は、実子が死の床に就こうとしているときですら、間近にいながら自分が本当の母親であることを告白することができないのである。このように、夫を裏切った彼女には次々と試練が与えられ、平穏が訪れることはなく、安らげる場所もどこにも見つからないのである。Woodは、Isabelを用いて、罪に対する償いを説くだけでなく、語り手を物語に介入させて、読者に警告を発している。この作品は、サディスティックな語りにより、Isabelに苦痛を与え、彼女の苦しみと彼女の誤った行動を罰することによって、誤った判断が人生を狂わせることを示唆している。しかしながら、これらの罰や警告は、必ずしも男性の決めた理想の中に女性を閉じ込めることを説くのではなく、女性の選択の狭さを明らかにしているのである。

これらのことから、Woodは、単にヴィクトリア朝の女性に道徳を説いているだけではないことがわかる。そして、この作品に登場する主人公が「家庭の天使」という与えられた役割にもがく姿が、特に中産階級女性読者の共感を誘ったためにヴィクトリア朝の一時期にこのジャンルが流行ったといえる。つまり、この作品は時代の特異性により、女性読者の趣向に批判と曖昧性でもって結びついていると考えられるのである。

【研究発表（２）】

ワシントン・アーヴィング『マホメットとその後継者たち』に見るイスラーム表象

外山健二

ワシントン・アーヴィング(1783-1859)が『スケッチ・ブック』(1819-20)や「スリーピー・ホローの伝説」(1820)の作家として知られていることは周知の事実である。だが、彼の作品『マホメットとその後継者たち』（1849-50）はどの程度知られているのだろうか。この作品を研究することで、19世紀前半のアメリカ文学台頭期に活躍したアーヴィングという枠組みから新たな地平を開くことができるだろう。そのことは『マホメットとその後継者たち』の新たな存在意義へと連動するだろう。

『マホメットとその後継者たち』に関する先行研究として大きく三つの視点を挙げておきたい。

(1)イスラーム創始者のマホメットに関するロマンス的物語という視点

(2)イスラームに関する歴史的物語という視点

(3)宗教や歴史に関する観点からは失敗作とする視点

(1)や(2)に言及する時、この作品に潜むロマンス性や歴史記述を認めながら、歴史と虚構の混在や事実とロマンスの混在こそこの作品の特徴として注目すべきだろう。その観点からは(3)の視点であるこの小説を失敗作品と見るのではなく、事実とロマンスを混在させた意義を問うことで、この小説を再考することが大切となるだろう。

この作品は当初二巻本で発刊された。第一巻は1849年に刊行され、第二巻は1850年に刊行される。それぞれに序文が付加され、その特徴を読み取ることができる。第一巻の序文では、マホメットの生活に関する記述がある。この作品を書く目的の一つは、「東洋文学」へと収束される伝説を収集することで、マホメットに関する事実を平明に書くことである。第二巻の序文では、マホメット死後の632年からムスリムによるスペンイン侵略の年である710年までを記述することが書かれている。ここでは一種の伝記や年代記の形がとられ、そこでアーヴィングはこの作品を書くにあたって様々な資料を利用し、事実を散りばめたと書く。

以上からは、彼自身東方に関心があり、アメリカ人にイスラーム世界の紹介という目的があったことは推測できる。トマス・カーライルの『英雄崇拝論』(1841)から読み取れるように、ヴィクトリア朝期においてマホメットが英雄として扱われる時代観であったことが分かる。そのため、アーヴィングがマホメットを「英雄」として記述したという主張も成立するだろう。

しかし、この小説の特徴の一つは、脚注によって歴史事実を明示することである。たとえば、ヴィクトリア朝期に活躍した東洋学者エドワード・レイン（1801-76）の『当世エジプト人の風俗と習慣』(1836)が脚注として使用される。この書は近代的な実証主義的学問分野が20世紀に確立する以前の、1820年代から30年代の現地調査に基づく詳細な民族誌とも言える。それは、ナポレオンがエジプト遠征から持ち帰ったさまざまな資料を集成した『エジプト誌』の刊行がフランスで進められていた時期とほぼ重なる。ここから考えても、事実に基づく歴史ロマンスが中東やイスラームの視点から記述されたのが『マホメットとその後継者たち』でもある。レインによる「経験」という権威を認めつつ、アーヴィングは単なるロマン主義的作品を回避し、巡礼地としてのオリエントではない経験や事実に基づく小説のあり方を提示したとも言える。ロマンティシズムからリアリズムへの移行時期における小説を考える時、経験を重視したレインの〈民族誌〉を脚注とする『マホメットとその後継者たち』に新たな論証を追究することが今後の研究課題であるだろう。

発表後にご質問をいただいた、ポール・ボウルズやチャールズ・ディケンズとの関連については、イスラームという観点から大きなテーマともなり今後の課題であろう。

【研究発表（３）】

マリ・バッシュキルツェフの妹たち

岡谷慶子

マリ・バッシュキルツェフの日記の1891年英訳版が出された時のセンセーションを顧みて英語圏における影響力について考察したい。マリは1858年生まれだが日記にも墓碑にも1860年生まれと記されているため、早熟と夭折の悲劇性は強調され、老嬢の汚名は免れた。彼女はフェミニストのユベルティーヌ・オークレヌに出会い、急進的な団体に関わる女権活動家の一面もあった。女性芸術家同盟に参加し、ポーリーヌ・オレルの偽名で「ラ・シトワイエンヌ」に数回、美術批評と論説を寄稿している。そこで19世紀の女性芸術家であろうとすることの困難さを弁明し、美術界の女性への閉鎖性を訴えていた。

マリは19歳の時ジュリアン・アカデミーに入るが、アトリエに現れたレースや毛皮の飾りのついた白いドレスを着てペットのプードルを連れてという場違いな貴族令嬢のいでたちとはうらはらに、その天才ぶりはお嬢様芸ではなく教授たちを驚かせた。7年の修行ののち、パリのサロンに出品するようになったが、その制作は肺病と療養の為に度々中断された。晩年に完成した「集い」という作品はバスチャン・ルパージュの影響がみてとれるパリの下町の子供たちを描いた風俗画である。彼こそがマリの師であり最後の恋人だった。

日記はマリが生前から出版を望み、死の翌年に母親が作家アンドレ・チュリエに持ち込んで一部が出版され、一大センセーションを引き起こした。ウィリアム・グラッドストンは仏語版で読んで、『日記』は比類のない注目すべきものとして、その著者は30年に一人現れるかどうかの異常な天才と評した。その後、マチルド・ブラインドによる英訳版が出るとイギリス人はこぞって『日記』を買って読んだ。アメリカではメアリー・セラーノ訳が出版された。その時代に『日記』が大衆に及ぼしたインパクトは画期的で「ガールズ・オウン・ペーパー」で説かれるような、娘たちに期待される慎み深く自己を殺して虚栄を捨て生きるという教訓が覆されたのである。アメリカの「新しい女」をめざす娘たちはバイブルのように『日記』に夢中になり、ひとつのカルトになった。ジーン・ウェブスターはヴァッサー女子大で学び『あしながおじさん』でその学生生活を活写しているが、授業のテクストにも取りあげられた。『日記』の同じ個所を、カナダの作家ルーシー・モンゴメリーも作中に引用している。エミリーが死後、出版され不朽の生命を得られることを期待して日記を書くという行為は、『日記』が示唆したものである。モンゴメリーは自伝的な『エミリー』三部作を書いているころ、『日記』を手に入れたが、大人のモンゴメリーにとってはもはや読むに堪えないものになっている。

結核と芸術の天才が結びつけられ美化される言説においてマリと類比されているのが、若き日のキャサリン・マンスフィールドである。ニュージーランドの資産家の娘として生まれたマンスフィールドはロンドンにも留学の機会を得るが、無理やり故国に連れ戻される。1907年の秋に『日記』を読み、その語り口にも思想にも大きく影響されたことが、彼女の手記に明らかである。そのマリから吸収した名誉欲は、ヨーロッパの華やかな文明生活への希求へと彼女を駆り立てる。マリの感化は、マンスフィールドのその後の絶えず傲慢と絶望に引き裂かれ自己劇化された生き方にもうかがえる。ナルシシズムは思春期特有の病いとして、『日記』は青年心理学の文献でも引証されているが、シモーヌ・ボーヴォワールは、マリをナルシシズムの女として斬る。マンスフィールドはやがてマリ・バシュキルツェフとナルシシズムを卒業して、芸術家としての完成に近づいていくことになる。

【研究発表（４）】

J. M. W. ターナーの『ジュリエットと乳母』にみるヴェニス

髙橋明日香

1836年ロイヤルアカデミーに出展されたターナーの『ジュリエットと乳母』は、ジョン・イーグルズによる厳しい批判を招いた。本来はヴェローナで繰り広げられるシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を、ヴェニスのサンマルコ広場を舞台に描いた点が主に指摘された。これに対しジョン・ラスキンは反論し、そのときの投稿原稿がのちに出版されるターナー賛辞の『近代画家論』へ発展した。本発表ではこのイーグルズ・ラスキン論争を出発点とし、『ジュリエットと乳母』の再評価を試みた。従来の研究は断片的な批評にとどまっているのに対し、文学的、社会的、あるいは芸術的観点からターナーのヴェニス像を構築することで、果たしてシェイクスピア戯曲との矛盾は批判されるべき問題点なのか検討していった。

両批評家は論争の中で、表現の仕方、そして評価は異なるが、『ジュリエットと乳母』のもつ二面性、地誌的な正確さと創造的な不明瞭さを指摘した。ではこの二面性の基礎に何があるのか、ターナーのヴェニスはどのような要素を内包したものなのか具体的に見ていった。

絵画においては珍しい題材である夜のサンマルコ広場がこの作品には描かれている。ロジャーズ、バイロンなどによる当時の詩にはよく描写される光景であった。そこでこの絵画作品のヴェニスを彼のスケッチブックのヴェニスと比較し、そこに差異が見られるか、さらに同時代の詩のヴェニスの描写との間に類似性が見られるか検討してみた。ターナーがヴェニス滞在時に宿泊したホテルの屋上からの眺めを描いたスケッチは、その独特の高い視点が『ジュリエットと乳母』に関連性があることを示唆する。夜のサンマルコ広場の光景を描いたものも多くあるが、それらには賑やかな輝かしさは欠けている。つまり『ジュリエットと乳母』に描かれた過剰なまでに華やかな祝祭の様子は架空のものであり、特に詩で語られた光景と共通すると考えられた。スケッチブックに記録された実際の景色が変容し、文学作品に描写された風景と類似性を示すものになったのだ。一方、花火や海に浮かぶ船、広場の群集が被る二つの角を持つ帽子など、ターナーの見た当時のヴェニス風景がそのまま残されている部分も油彩作品には見られる。

このように『ジュリエットと乳母』のヴェニスには、ターナーの実際見た地誌的なヴェニスと、文学作品に描かれた架空のヴェニスの二つの要素があることが分かった。その結果夜のサンマルコ広場を高い視点から捉えるという、絵画の分野では新しい様相を呈することになったのだろう。さらに当時の風景の記録的な部分もターナー独自の画風により独創的に表象され、地誌的要素が創造的要素により変容し、互いに融合したとも言えるのではないだろうか。

結論として、ターナーのヴェニス像は地誌的、そして文学的なものの融合体であり、ターナーに批判的なイーグルズも擁護の立場をとるラスキンも、それぞれが実は『ジュリエットと乳母』の持つ多層性を捉え批評していたことがわかった。特定の材源を持たない、あるいはそれを意識させないよう様々な要素を一つの絵画にまとめる自由な翻案の姿勢が、ターナーの絵画制作の特徴であると言える。その例の一つとして、『ジュリエットと乳母』のヴェニスの風景にもさまざまな要素を見出せ、時には有機的つながりのないものを融合させることであらゆる解釈が可能になる。発表後ご指摘いただいた「なぜジュリエットを描いたのか」という疑問も、ヴェニスだからこその解釈があるかもしれない。『ロミオとジュリエット』をサンマルコ広場を舞台に描いたという明白な矛盾はもはや問題ではなく、『ジュリエットと乳母』をいわゆるシェイクスピア絵画のカテゴリーに括らず、「ターナー一流の絵画」の一つとするべきなのではないだろうか。

【研究発表（５）】

次世代の文学へ向けて
―アーサー・シモンズと『サヴォイ』―

庄子ひとみ

アーサー・シモンズが編集・執筆双方で中心的な役割を果たした雑誌『サヴォイ』（*The Savoy*：Jan-Dec,1896）は、創刊から一年で廃刊という事実からも商業的な失敗という印象は否めない。しかしその誌面に眼を転じてみれば、シモンズが掲げた編集方針を反映し、次世代の文学の動向を見つめている先見性と国際性にあふれている。少なくとも『イエロー・ブック』の二番煎じという評価は不当ではないだろうか。

『サヴォイ』創刊が企画された1895年は、オスカー・ワイルドの逮捕をきっかけとして英国内でデカダントへの反発が強まった時期であった。『イエロー・ブック』は保守的な読者のクレーム対応としてオーブリー・ビアズリー解雇を決断したが、この騒ぎをチャンスと見なした人物が、出版人レナード・スミザーズである。シモンズはスミザーズの「新しい雑誌の文芸編集を任せたい」という申出を、ビアズリーを美術編集にするという条件で引受けた。シモンズが書物の内と外、内容と装丁の望ましい調和の重要性について意識的であったように、『サヴォイ』誌面はどの頁もマージンが贅沢にとられ、ゆったりとした版面構成が特徴的で、かつ『イエロー・ブック』を大きく上回る『サヴォイ』のサイズは微細な描き込みを特徴とするビアズリーの作品を効果的にみせることができた。創刊号はシモンズによる“Editorial Note”から始まり、マラルメも絶賛したこの声明文はシモンズの文筆家としての信条をも表している。どんな流派にも属さないことを強調し、有名無名問わず、優れた芸術性だけが唯一の条件として明記されている箇所は、シモンズやビアズリーの名前から『サヴォイ』を安易にデカダンスと結びつける読者の先入観を払拭するべく考えられていると同時に、新しい文学の可能性を模索する積極的な姿勢、何人に対しても開かれた自由な往来を約束するコスモポリタニズムの基本精神をも彷彿とさせる。海外作品はフランスの割合が最も高いが（全体の約三割）、ベルギーにアメリカ、インド、カナダと執筆者の出身は多岐に渡る。

ジョーゼフ・コンラッドや詩人であり女性としては最初のインド国民会議代表になったサロジーニ・ナイーデュは『サヴォイ』でデビューを果たした。また、ハヴァロック・エリスの連載エッセイは英国では最も早い本格的なニーチェ紹介である。

同じフラットに住んでいた親友イェイツと『サヴォイ』編集作業を含め常に顔を合わせていたこの時期は、シモンズの象徴主義発見にいたる前段階としても注目に値する。錬金術をはじめとして神秘主義思想に傾倒していたイェイツが薔薇十字団の伝説やケルトの伝承物語等を題材に作品へと昇華させていた一方で、スウェーデンボルグを経由してウィリアム・ブレイク作品への興味を共有していたシモンズは、眼に見える世界だけが全てではない、内なる眼がみるビジョンに注目していた。彼らの関心の共有及び意見交換は、誌面を通じて活発に行われている。

不利な状況下で理想の雑誌作りを目指し奮闘したにも関わらず、突然大手の販路を絶たれ廃刊に至った無念は量りしれない。しかし、彼らが翻弄された19世紀末の出版業界と読者の構造は、20世紀以降も競争を加速させ巨大化し続けるマスメディアの功罪を知る我々が興味深く共有できる眺めなのだ。批評家シモンズの文学的視野を拡げる重要な道程だった『サヴォイ』は、世界に先駆けてマスメディア時代に突入した当時の英国の雑誌出版をめぐる構造を読み解く上でも繰り返し参照するに値する素材であろう。

【研究発表（6）】

ジーン・リース再考
―クリオール女性史の観点から―

堀内真由美

本報告は、小説『広い藻の海』(1966)で知られる作家ジーン・リース(1890-1974)の生涯と作品を通して、ヴィクトリア朝の社会秩序がリースのアイデンティティ形成と自己認識に与えた影響を明らかにしようとした。なお、報告では1833年の奴隷解放令以前から英領西インドに住み、そこで生まれた本国系白人をクリオールと呼ぶ。

英領西インド諸島ドミニカに生まれたリースの母方の曽祖父は、258人の奴隷を所有する大農園主（プランター）だった。奴隷解放後も続く植民地社会で、奴隷主の子孫という自己認識は、リースの人格形成に大きな影響を及ぼす。黒人の使用人や混血の同級生に囲まれる少女時代に、圧倒的少数でありながら支配層にとどまるクリオールへの視線を意識させられながら生きることで、決して好かれない存在だと自覚していく。

多くのクリオールの子どもたちと同様、リースも教育を受けるため17歳で本国イングランドに渡る。20世紀初頭の本国は、ヴィクトリア時代から続く社会秩序、つまり「本国白人」「植民地白人」「植民地非白人」という「人種と階層」による序列が支配的な社会だった。リースは編入した女学校でも、女優を志して入学した俳優学校でも、「適正な英語」と「英国人らしさ」が障壁となり、自尊心を損なわれ将来の希望を絶たれてしまう。逃げるように本国からヨーロッパに移動するが、本国での挫折を補填するほどの成功は得られなかった。離婚後、1920年代後半に本国に戻り、作家活動を本格化させる。

20年代終わりから30年代にかけて、故郷を題材とした短編と長編を発表するが、そこでは、「本国の正統文化」に臆することのない「カラード」を称揚したり、「イギリス嫌い」を公言したうえ「正真正銘の西インド人だ」と宣言するリース自身を写したクリオール女性を描いた。いずれも10代の自分から自信や希望を奪った「本国」や「本国人」への対抗軸としての「西インド」であり、「西インド人」としてのプライドの投影である。

ところが、1936年の帰省がリースの自己認識を動揺させる。故郷西インドにおける脱植民地化運動の始まりと遭遇したからである。報告では、リース論および作品論において、これまで真正面から取り上げられることがほとんどなかった、この帰郷の際のインパクトを強調した。とくに本国人に対する「西インド人のプライド」を支える大きな要素であった、母方一族の広大な所領と屋敷が、植民地自治派によって放火され跡形もなくなっていたことにリースは言葉を失くす。長らく実感していなかった「奴隷主の子孫」という植民地支配の「歴史」の所産である自己と、脱植民地化の始動という「現在」を阻害する側だと見なされる自己を、いやがうえにも確認させられる帰省だった。

『広い藻の海』は、1939年には第一稿が完成していたとされる。そのなかで、『ジェイン・エア』の「狂ったバーサ」を同じクリオールの立場から描き直し、本国人への異議申し立てを果たしたリースだが、同時に彼女は、帰省後の自己認識の動揺を描き込んでもいた。主人公が発する「私はいったい何者なのか」という問いはリースの問いであり、「迷子になったクリオール」とはリース自身の姿でもあった。ヴィクトリア朝の「遺産」である植民地支配が生んだクリオール、ジーン・リースを通した考察は、女王の死をもってもなお終わらない「ヴィクトリア朝」の、「他者」への影響力の大きさを改めて示すもの、と報告を締めくくった。

第12回大会シンポジウム企画
「海の歴史とヴィクトリア時代」

趣旨

ヴィクトリア時代のイギリスの歴史や文学を考えるとき、そこに「海」は適切に組み込まれているだろうか。漠然と強大な海軍や活発な海運、賑やかな海浜リゾートを想起することはあっても、当時のイギリスを構成したmaritimeな要素を整理し、体系的に把握する試みはなされていないのではないだろうか。本シンポジウムでは、ヨーロッパ北辺の島国ゆえに独特であった近代のイギリスと海――北海・バルト海、英仏海峡、地中海、大西洋、インド洋、太平洋――の関係を考えるための土台を提示してみたい。それは、近く刊行予定の金澤周作編『海の歴史・入門――比較と関係の中のイギリス近世・近代』（仮題、昭和堂）の内容に即した歴史学的な知見であるが、文学をはじめとする隣接諸科学との対話を通して、「海」という切り口の可能性をともに広げていけたらと考えている。

シンポジウム構成

１．海の歴史のルネサンス（金澤周作：京都大学）

海の歴史について積み重ねられてきた成果を元にして、イギリス近代を海から考える効用（と海から考えないことの問題性）を論じ、次に「海から考える」際の留意点を整理し、最後にmaritime Britainの組成とその相対的な位置付けを試みたい。議論の枠組みとして、次の3種の尺度を重視する。①グローバル／ローカル　②クルーソー／ガリバー　③ランドスケープ／シースケープ。

なお、ここで示されるグランド・デザインに沿った形で、後の各報告はなされることになる（『海の歴史・入門』の目次は下記を参照）。

２．海とともに生きる（坂本優一郎：大阪経済大学）

ヴィクトリア時代の人びとの生は海と密接に結びついていた。沿岸部には漁業で生計をたてるコミュニティがあり、都市には海運で致富する人びとがおり、商船や軍艦に乗り組む無数の水夫、船によって運ばれる奴隷や移民や旅客がいた。かれらはどのような人びとだったのだろうか。階級やジェンダー、エスニシティの問題ともからめながら論じる。

３．海を飼いならす（石橋悠人：日本学術振興会特別研究員DC）

危険で謎に満ちた海は、知のフロンティアであった。緯度や経度を計測する、天候を予測する、海図を作成する、船舶を改良する、海難を予防する、定期航路を開く、通信網を整備する、海洋資源を把握する、といった試みは、きわめて「科学的」なものであった。ここでは、ヴィクトリア時代の科学が海とどのように対峙したかを論じる。

４．Maritime Britainの個性――近世イベリア史の視点から（合田昌史：甲南大学）

一見自明なように映る島国イギリスと海の関係は、海との新たな関係を創始してヨーロッパ近代の一つの方向性を定めたといっても過言ではないイベリア半島の15～17世紀の経験と対比すると、どのように違って見えてくるだろうか。地政学的、あるいは歴史的な状況がどのように海との関係を規定するのかを論じる。

５．質疑応答・議論

休憩時間の間にあつめた質問用紙や、フロアからの発言に基づいて、ヴィクトリア時代を海から再考する目的や方法を練り深めていく。上記の「グランド・デザイン」が議論の拡散を防ぐ役割を果たすであろう。

【参考文献】

『海の歴史・入門』（仮題）目次

＊同書が示す全体像を踏まえて、シンポジウムは構成される。

総説　海の歴史のルネサンス（金澤周作）
第一部
第一章　探険・科学―「未知なる世界」をめざして（石橋悠人）
第二章　海軍―「木の楯」から「鉄の矛」へ（薩摩真介）
第三章　海と経済（坂本優一郎）
第四章　港―「繁栄」の光と影（林田敏子）
第二部
第一章　海難―アキレスの腱（金澤周作）
第二章　密貿易と難破船略奪―境界線上の世界（金澤周作）
第三章　海賊―「全人類の敵」？（薩摩真介）
第四章　私掠―合法的略奪ビジネス（薩摩真介）
第三部
第一章　近世フランス経済と大西洋世界（君塚弘恭）
第二章　近世フランスの海軍と社会―海洋世界の「国民化」（阿河雄二郎）
第三章　ポルトガル・スペインと海（合田昌史）
第四章　オランダ史と海（大西吉之）
第五章　近代中国沿海世界とイギリス―海賊、海難と密貿易（村上衛）

日本ヴィクトリア朝文化研究学会2011年度総会報告

日時：2011年11月19日(土)　13時～13時40分
場所：甲南大学511教室

Ⅰ　報告事項

１．2011年度活動報告について

運営委員会(1回目[8月]、2回目[1月開催予定])、理事会(11月)、編集委員会(3回[2月に1回、7月に2回]）の開催。

２．学会誌について

第９号（投稿論文7篇中3篇掲載、研究ノート１篇、書評8篇）11月に発行。

３．ニューズレターについて

第10号（Malcolm Andrews教授の寄稿、若手研究者の研究概況報告欄を追加）5月に発行。

４．その他

会員名簿（2011年度版）を会員に送付。

Ⅱ　審議事項

１．役員改選について

荻野昌利(会長､理事)、森道子(理事、幹事)、原公章（運営委員長）、富士川義之(理事)、小野ゆき子（会計）佐藤明子(事務局長)、川端有子（学会誌編集委員）、宮崎かすみ（学会誌編集委員）、玉井史絵（NL編集委員）、関口章子(事務局員)、前島洋平（事務局員）は各役職を退任し、新たに井野瀬久美惠（会長）、川端有子（副会長､理事）、小関隆（理事、運営委員長）、有江大介（理事）、大嶋浩（理事、事務局長、運営委員）、佐々木徹（幹事）、髙田実（運営委員、NL編集委員）、菅靖子（学会誌編集委員）、渡辺美樹（学会誌編集委員）、上宮真紀（事務局員）、並河葉子（事務局員）が就任。合わせて､事務局の移転に伴い、「会則第3条　事務局」を「甲南大学文学部井野瀬久美惠研究室におく」に変更。

２．2010年度決算について

報告の通り了承（15頁参照）。

３．2011年度予算案について

予算案を了承（15頁参照）。

４．学会誌投稿規程の改訂について

投稿規定の第５条（ネイティブチェックと著作権に関して）、　７条（引証の形式について）、８条（送付先の事務局について）の一部改訂。

５．日本ヴィクトリア朝文化研究学会優秀論文賞の新設について

会の活動の活性化を図り、学会誌への投稿を促すことを目的として､優秀論文賞（賞金５万円、年齢制限なし）を新設することを了承。

６．ＨＰ上での名簿管理について

来年度（2012年度）の大会で掲載内容を会員に訊き、2013年度から実施の予定。

７．2012年度大会について

2012年11月17日（土）､中央大学で開催予定。大会会場は第一候補を駿河台記念館、第二候補を多摩キャンパスとし、2月末までに決定予定。

2010年度会計決算報告書

(2010.4.1～2011.3.31)

《収入の部》 単位:円

項　目	金　額	備　考
前年度繰越金	4,393,555	
会費	1,757,500	
事務局補助金	100,000	日本大学文理学部
出展料	35,000	
懇親会費余剰金	53,620	
利子	796	
合計	6,340,471	

《支出の部》

項　目	金　額	備　考
通信費	286,170	
大会経費	261,952	アルバイト料、茶菓代など
N. L.作成費	56,000	
学会誌作成費	580,650	
学会誌図書費	55,437	
振込手数料	32,280	
消耗品費	32,873	文具代など
役員会費	4,719	運営委員会、編集委員会
役員交通費	240,070	運営委員会、編集委員会
その他	33,385	NL執筆者へお礼 HP管理費
合計	1,583,536	

次年度繰越金	4,756,935	

会計　小野　ゆき子

会計監査　森　道子

2011年度会計予算案

(2011.4.1～2012.3.31)

《収入の部》 単位:円

項　目	金　額	備　考
前年度繰越金	4,756,935	
会費	1,989,000	一般会員319名 学生会員25名 (2011年3月31日現在)
出展料	25,000	5社
合計	6,770,935	

《支出の部》

項　目	金　額	備　考
通信費	286,000	
大会経費	200,000	
名簿作成費	138,000	
N. L.刊行費	56,000	
学会誌刊行費	580,000	
学会誌図書費	55,000	書評用図書
振込手数料	32,000	
消耗品費	33,000	文具等
役員会費	15,000	理事会、運営委員会 編集委員会
役員交通費	240,000	運営委員会 編集委員会
予備費	100,000	
合　計	1,735,000	

次年度繰越金	5,035,935	

合　計	6,770,935	

会員の業績2011 （2011年12月までの業績：書誌情報は基本的にNDL-OPACによる。価格は税込み）

【単著】

風間末起子

『フェミニズムとヒロインの変遷—ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』（世界思想社、2011年8月、ISBN978-4-7907-1532-0、4200円）

松村昌家

『文豪たちの情と性へのまなざし—逍遥・漱石・谷崎と英文学』（ミネルヴァ書房、2011年2月、ISBN 978-4-623-05875-4、3675円）

高橋美帆

『幻想の＜修道女＞—ブラウニング、ロセッティ、ホプキンズ』（英宝社、2011年5月、ISBN 978-4-269-72115-9、2520円）

真屋和子

『プルースト的絵画空間—ラスキンの美学の向こうに』（水声社、2011年2月、ISBN 978-4-89176-822-5、6825円）

冨田成子

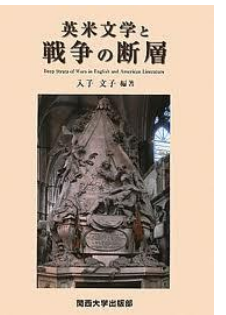
『ジョージ・エリオットと出版文化』（南雲堂、2011年3月、ISBN 978-4-523-29318-7、3800円）

【共著】

入子文子編著

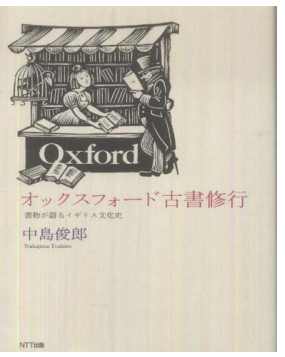
『英米文学と戦争の断層』（関西大学出版部、2011年1月 ISBN 978-4-87354-507-3、2730円）

入子文子「ホーソーンと追憶のなかのウルフ」
吉田一穂「前世紀の戦争 ディケンズによる奴隷制度批判と南北戦争前後のアメリカ」



中島俊郎

『オックスフォード古書修行—書物が語るイギリス文化史』（NTT出版、2011年9月、ISBN 978-4-7571-4280-0、 2520円）



河内恵子編著

『西部戦線異状あり—第一次世界大戦とイギリス女性作家たち』（慶應義塾大学出版会、2011年8月、ISBN 978-4-7664-1848-4、2940円）

河内恵子「中間地帯という居場所」、「母と娘が紡ぐ残酷物語」、「戦争という歴史/物語」

河内恵子、松田隆美編

『ロンドン物語—メトロポリスを巡るイギリス文学の700年』（慶應義塾大学出版会、2011年10月、ISBN 978-4-7664-1893-4、2940円）

原英一「19世紀前半–ディケンズの時代」
河内恵子「第二次世界大戦と現代—セーラ・ウォーターズ『ナイト・ウォッチ』を読む」

大榎茂行教授喜寿記念論文集刊行委員会編

『イギリス文学のランドマーク—大榎茂行教授喜寿記念論文集』（大阪教育図書、2011年11月、ISBN 978-4-271-21010-8、9450円）

直野裕子「『高慢と偏見』を読む」
坂田薫子「英国小説のキャノンと帝国」
馬渕恵里「語りの視点と距離」
奥村真紀「『嵐が丘』における自然の力」
小田夕香理「『嵐が丘』における「曖昧さ」と「揺らぎ」」
渡千鶴子「ワイルドフェル・ホールの住人」
早瀬和栄「アン・ブロンテの詩 `Self-Communion'における「省察」の意味」
服部慶子「「わたし」は何者か? 」
大嶋浩「「ブラザー・ジェイコブ」における二つの金貨」
新妻昭彦「エンジェルの系譜」
小野ゆき子「家庭教育を考える」
津田香織「アングロ=ボーア/南アフリカ戦争における距離の問題」
上原早苗「模倣される言葉」
清水伊津代「『トマス・ハーディの生涯』のディスコースとポストモダニティ」
西村美保「2重生活の連鎖と文化的背景」
宮川和子「『ムーンストーン』における帝国と女性」
高桑美子「ばかげたほどに凝った、 過剰に飾り立てたカッコー時計」
皆本智美「コリンナの娘たち」

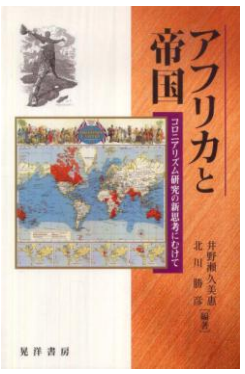
白井義昭、田中淑子、田村妙子 編
内田能嗣、清水伊津代 監修

『紫紅の荒野につながる絆—ブロンテの湖水地方』（大阪教育図書、2011年10月、ISBN 978-4-271-21012-2、1785円）

内田能嗣「まえがき」「旅程」
小野ゆき子「ハワース:ブロンテ記念館での講演」
清水伊津代「ナブ・コテージ、フォックス・ハウ:ブランウェルとシャーロットの＜湖水地方＞」
田中淑子「ゴーソープ・ホール、ブライアリー・クロウス、ザ・ノウル:ケイ＝シャトルワースとマーティノウ」「旅を終えて（二）」
松原典子「チョートン:「オースティン記念館」—みえてくるもの、誘ってくれるもの
松井豊次「チョートン:ジェイン・オースティンの生涯に触れて」

井野瀬久美恵、北川勝彦編著

『アフリカと帝国—コロニアリズム—研究の新思考にむけて—』（晃洋書房、2011 年 2 月、ISBN978-4-7710-2172-3、3800 円）



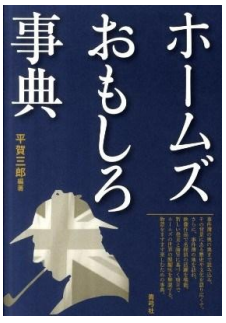
井野瀬久美恵「コロニアリズム研究の新思考にむけて」、「帝国の遺産—イギリスに対する帝国の余波」（翻訳）
上宮真紀「ジンバブウェ史研究の黄金期とその衰退—一九六七年から現在まで」（翻訳）

内田能嗣、会田瑞枝、早瀬和栄著訳

『風景のなかのジェイン・オースティン』（大阪教育図書、2011年7月、ISBN 978-4-271-31016-7、2940円）

清宮倫子、清宮協子編著

『よくわかるイギリスの文学』（南雲堂、2011年11月、ISBN 978-4-523-17709-8、2100円）



平賀三郎編著

『ホームズおもしろ事典』
（青弓社、2011年8月、ISBN 978-4-7872-9201-8、2100円）

木下信一「ウィリアム・ジレット」「旧ソヴィエト連邦のホームズ」他
中尾真理「カレー料理」「謙遜な科学者、モーティマー医師」他
中島俊郎「自転車ブーム」「養蜂家ホームズ」

Shigemi Inaga (ed.),

Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empires (Kyoto: International Re-search Center for Japanese Studies, 2011）

(Part Ⅱのみ目次紹介。他のPartは執筆者のみ)

,

Part I Oriental Reactions to Western Cultural Hegemony
（Michael F. MARRA, INAGA Shigemi, MIN Joosik）

Part II Western Rediscoveries of Oriental Cultures: Materiality and Spirituality

HASHIMOTO Yorimitsu 橋本順光 'Soft Power of the Soft Art: Jiu-jitsu in the British Empire of the Early 20th Century' / YO-SHINAGA Shin'ichi, 'Comments on Hashimoto's Paper'/ Minna TÖRMÄ 'Osvald Sirén's Encounter with the Arts of China and Japan
YOSHINAGA Shin'ichi, 'Comments on Törmä's Paper'
Manfred SPEIDEL, 'Japanese Traditional Architecture in the Face of Its Modernisation: Bruno Taut in Japan'

Part III Confrontations of Eastern and Western Institutions in Image-Politics
Ayako HOTTA-LISTER, FAN Liya, / GUO Hui,

Part IV Conflicts of Interpretations in Visualizing the Invisible Orient

Part V Western Academic Disciplines and Things Oriental
Olivier KRISCHERPAI Hyung Il, SANO Mayuko

Part VI Orient on Display: Conflicts between Self-Image and Western Expectations
Bert WINTHER-TAMAKI, Christine GREINER

Part VII Oriental Identity in Question: Beyond East-West Dichot-omies
Félix U. KAPUTU, HOSOKAWA

Part VIII General Comments
HAMASHITA Masahiro, ŌHASHI Ryōsuke,

十九世紀英文学研究会編、福岡忠雄監修、北脇徳子、渡千鶴子、風間末起子、杉村醇子編著

『『カスターブリッジの町長』についての11章ー小説の読み方・論じ方』(英宝社、2010年11月、ISBN 978-4-269-72110-4、3150円）

福岡忠雄「読み直す『カスターブリッジの町長』」
坂田薫子「ゴシック小説として読む『カスターブリッジの町長』」
風間末起子「聖家族の瓦解と再生産」
北脇徳子「ヘンチャードを巡る三人の女性たち」
渡千鶴子「エリザベス=ジェインを非嫡出子として読む」
清水伊津代「『カスターブリッジの町長』とケルト的表象」

藤川隆男編

『アニメで読む世界史』
（山川出版社、2011年9月、ISBN 978-4-634-64054-2、1575円）

堀内真由美「小公女セーラ—イギリス社会の階級意識と帝国」

森岡裕一編

『西洋文学：理解と鑑賞』
（大阪大学出版会、 2011年10月、ISBN 978-4-87259-388-4 2100円）

橋本順光「ギリシア・ローマ神話」、「オリエンタリズム」

【翻訳】

タイラー・コーエン著（田中秀臣監訳・解説、浜野志保訳）

『創造的破壊――グローバル文化経済学とコンテンツ産業』（作品社、2011年6月、ISBN 978-4-86182-334-3、2520円）

マリア・ニコラエヴァ、キャロル・スコット著（川端有子・南隆太訳）

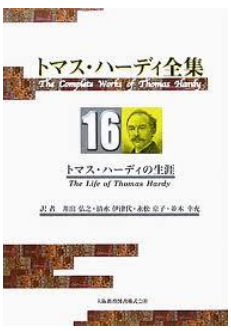
『絵本の力学』（玉川大学出版部、2011年３月、ISBN: 978-4-472-40434-4、5040円）

トマス・ハーディ著（内田能嗣、押本年眞、津田香織、前田淑江、渡千鶴子、森松健介編訳、坂田薫子、清水伊津代他訳）

『詩集Ⅰ（トマス・ハーディ全集15-1）』（大阪教育図書、2011年2月、ISBN 978-4-27131-000-6、7350円）

フロレンス・Ｅ・ハーディ編著（井手弘之・清水伊津代・永松京子・並木幸充訳）

『トマス・ハーディの生涯 1840～1928年（トマス・ハーディ全集16）』（大阪教育図書、2011年9月、ISBN 978-4-27131-003-7、7350円）

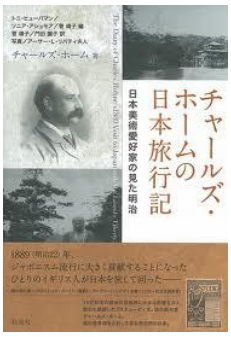


Ｄ．Ｈ．ロレンス著（吉村宏一、今泉晴子、霜鳥慶邦他編訳、岩井学・横山三鶴他訳）

『Ｄ．Ｈ．ロレンス書簡集 Ⅵ　1915』（松柏社、2011年3月、ISBN 978-4-77540-173-6、5775円）

チャールズ・ホーム著（トニ・ヒューバマン、ソニア・アシュモア、菅靖子 編; 菅靖子、門田園子訳）

『チャールズ・ホームの日本旅行記―日本美術愛好家の見た明治』（彩流社、2011年3月、ISBN 978-4-7791-1607-0、3150円）



【編纂】

松村豊子監修・解説

『女性と職業：英国19～20世紀初頭文献集成』、11文献・合本5巻＋別冊解説（ユーリカ・プレス、2011年1月、ISBN 978-4-902454-72-7、本体セット118,000円）

松村昌家監修・解説

『日英博覧会（1910年）―公式史料と関連文献集成』　、復刻集成版　全11文献・合本6巻＋別冊解説（日本語）、（ユーリカ・プレス、2011年11月、ISBN 978-4-902454-75-8、本体セット148,000円）

三井（山本）淳子編集・解説

復刻文献シリーズ『ヴィクトリア朝時代の育児論』　第１回配本：『エイダ・バリン著作集』（復刻集成版全4巻＋別冊解説「後期ヴィクトリア時代における子育てと母親像」）（ユーレカ・プレス、2011年3月、ISBN 978-4-902454-63-5、本体セット 88,000円）

第12回大会のお知らせと研究発表の募集

募集中！

第12回大会は、**2012年11月17日(土)午前9時30分から中央大学駿河台記念館で**開かれる予定です。

シンポジウムの題目は**「海の歴史とヴィクトリア時代」**で、コーディネーターの京都大学准教授金澤周作氏を中心に、坂本優一郎氏（大阪経済大学講師）、石橋悠人氏（日本学術振興会特別研究員DC）、合田昌史氏（甲南大学教授）の各氏がパネリストを務められます（企画書は13頁参照）。

また今年は京都大学教授の大浦康介氏に特別講演をお願いすることになっております。講演題目は**「ヴィクトリア時代と《猥褻》の概念:『わが秘密の生涯』を読む」**です。どうぞふるってご参加ください。

研究発表を希望する会員は、発表要旨(400字)に略歴(氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記)と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送でお送り下さるかあるいはメールの場合は、添付ファイルで学会のメールアドレス(victoria@center.konan-u.ac.jp)までお送りください。メールの場合、受け取りの返信が行かない場合はお手数ですが再度送信してください。**締め切りは2012年7月14日(土)必着でお願いいたします。**なお、学会の性質上、研究発表は「文化研究」に比重をおいたものとします。

駿河台記念館へのアクセスガイド

■JR中央・総武線　御茶ノ水駅下車、徒歩3分
■東京メトロ丸ノ内線　御茶ノ水駅下車、徒歩6分
■東京メトロ千代田線　新御茶ノ水駅下車（B1出口）、徒歩3分
■都営地下鉄新宿線　小川町駅下車（B5出口）、徒歩5分

（http://www.chuo-u.ac.jp/chuo-u/access/access_surugadai_j.html より作成）

編集後記

この号から編集担当者が交代しました。不手際ばかりが多く、発行日も予定から遅れてしまいました。関係の方々にはご迷惑をおかけいたしました。VSSJの新しい一面を表現しようと思い、誌面も一新しました。皆様のご協力で誌面を充実させていきたいと思っております。ご協力・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます（Min）。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
事務局
〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1
甲南大学文学部 井野瀬久美惠研究室
Tel: 078-435-2344
E-mail: victoria@center.konan-u.ac.jp
http://www.vssj.jp/